

ご存知ですか？ 美しい村、精華町の植田村 ふるさと案内人と行く

第10回ふるさと発見の旅

—秋—



土と炎の詩人 河井寛次郎
「河井寛次郎記念館」様より引用

河井寛次郎がこよなく愛した 菅井～植田の里巡り

開催日：11月9日（水）

集合：午前9時00分 近鉄新祝園駅東口前

解散：午後3時頃 JR祝園駅西口前



《コース 約6km》

「釈迦の池」

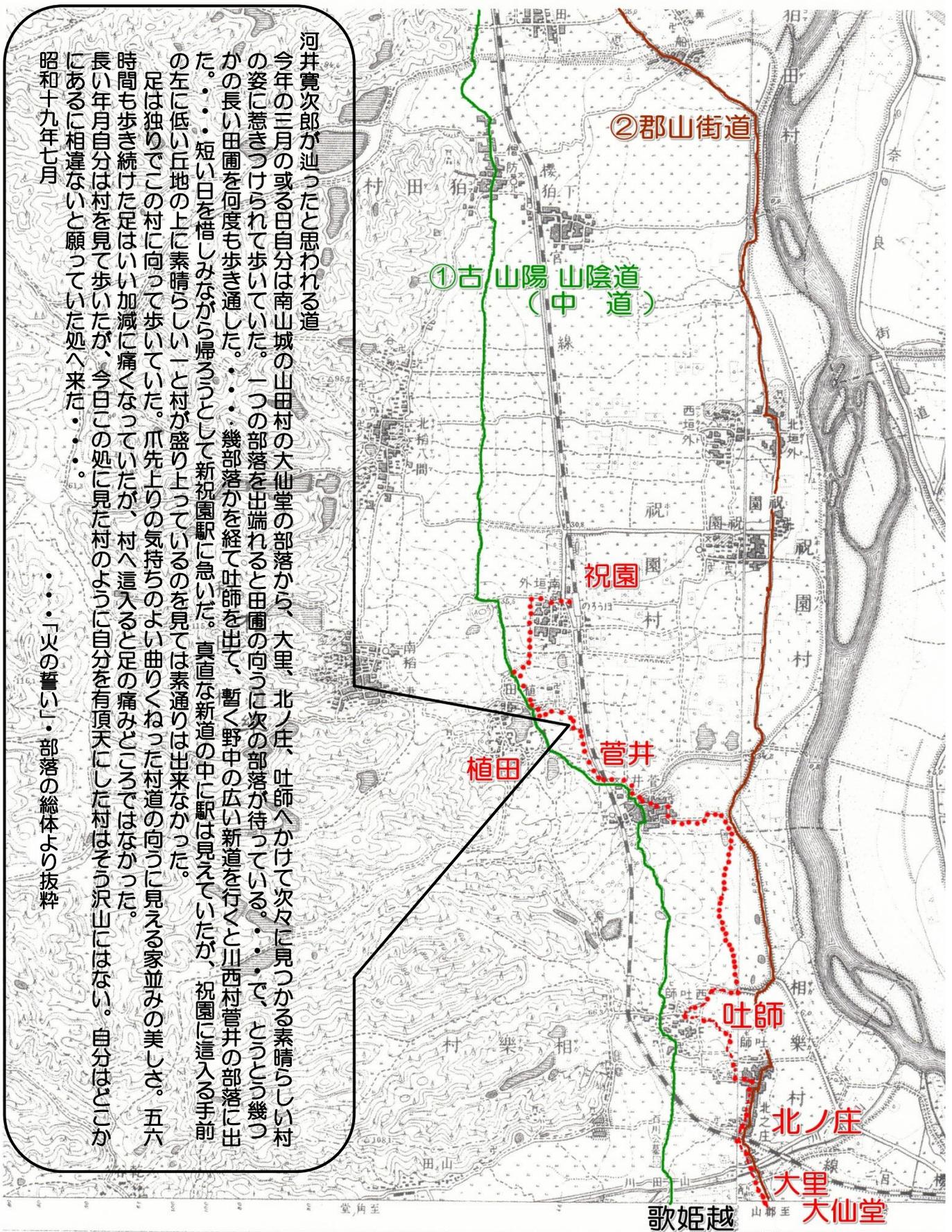
祝園駅東口前（スタート）

- 郡山街道（仇討地蔵）→乗越堤
- 菅井の集落 →豊川稲荷 →寶住寺
- 天王神社 →畑ノ前遺跡 →稻植神社
- 如来寺 →植田の集落 →釈迦の池
- 来迎寺 →祝園駅西口前（解散）



主催：精華町ふるさと案内人の会
（社団法人 精華町シルバー人材センター内）
後援：精華町 ・ 精華町教育委員会





河井寛次郎が辿ったと思われる道

今年の三月の或る日自分は南山城の山田村の大仙堂の部落から、大里、北ノ庄、吐師へかけて次々に見つかる素晴らしい村の姿に惹きつけられて歩いてきた。一つの部落を出端れると田圃の向うに次の部落が待っている。……で、とつとつ幾つかの長い田圃を何度も歩き通した。……幾部落かを経て吐師を出て、暫く野中の広い新道を行くと山西村菅井の部落に出た。……短い日を惜しみながら帰るつもりとして新祝園駅に急いだ。真直な新道の中に駅は見えていたが、祝園に這入る手前の左に低い丘地の上に素晴らしいと村が盛り上っているのを見ては素通りは出来なかった。

足は独りでこの村に向って歩いていた。爪先上りの気持ちのよい曲りくねった村道の向うに見える家並みの美しさ。五六時間も歩き続けた足はいい加減に痛くなっていたが、村へ這入ると足の痛みどころではなかった。

長い年月自分は村を見て歩いたが、今日この処に見た村のように自分を有頂天にした村はそう沢山にはない。自分はどこかにあるに相違ないと願っていた処へ来た。……

昭和十九年七月

……「火の誓い」・部落の総体より抜粋

・①：古山陽山陰道(中道)と云われている。②：郡山街道。……：河井寛次郎が辿った道？

こおりやまかいどう あだうちじそう
郡山街道の仇討地蔵

六部と子供が仇を探してこの地に来た時、
仇と出逢い相討ちで三人とも息絶えた。
その霊をなぐさめる 仇討地蔵



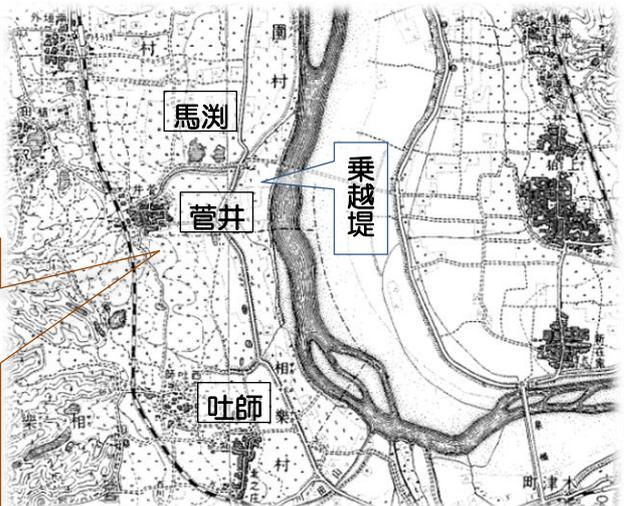
六十六部『日本風俗図絵 第7輯』



のり こし つつみ
乗越堤と菅井の集落

菅井は、奈良時代には既に集落があり、中世には興福寺の荘園として、近世は禁裏御料・公家領の菅井村として、明治維新で領地は公売・返上で、個人の所有となった。

菅井・吐師は木津川の流れが北へ大きく変わるところで水害が絶えなかったため、豊臣秀吉の時代に堤防が築かれた。しかし、慶長年間（1600年頃）にも木津川が氾濫し、菅井の乗越堤も切れ、西側の高地に移り住んだと言われています。（小字古里から西の辻へ）その後も正徳2年（1712）、安政6年（1859）、明治3年（1870）にも氾濫で乗越堤が決壊し、田畑は壊滅、乗越堤の北側の馬淵には、3つの淵（西・中・東）が明治にも出来ました。



・・・こうした幾部落かを経て吐師を出て、暫く野中の広い道を行くと「川西村菅井」の部落に出た。この部落もまた思った以上に、村端の酒造家の海鼠(ナマコ)塀と門に取り囲まれた壮麗な一廓や、小さい野鍛冶の美しい仕事場などに時間を忘れ、短い日を惜しみながら帰ろうとして新祝園駅に急いだ。
・・・「火の誓い」・部落の総体より

功德山 寶住寺 (くどくさんほうじゅうじ)

寶住寺は菅井小字西の辻 65 に在り、木津川堤防を背にして見上げると白塀に囲まれたお寺の屋根が見えてきます。ゆるやかな坂を上がっていくと、菅井の集落があり、すぐに寶住寺の山門の前に到着します。

山門を潜ると石塔が見え、右手に地藏菩薩像が祀られ、左手にかわいい子供の慈母像があります。正暦元年(990) 恵心僧都の創建という。正保年中(1644~48) 僧正道が中興し、それまでの延命庵を改め、今の寺号となりました。大正13年に本堂が火事になり、名古屋の栄国寺から本尊(阿弥陀如来立像)を迎えました。木津川を隔てて、東南方向には奈良の春日山、若草山が一望できる景勝の地に建つ 功德山 寶住寺です。



天王神社 (てんのうじんじゃ)

御祭神：建速須佐之男命

阿智之岐高彦命

神事： 1月 1日 元旦祭
4月 3日 春季大祭(祈念祭)
10月17日 秋季大祭(例祭)
11月23日 感謝祭(新嘗祭)

神社の由緒は不明であるが、元は菅井集落の東側小字古里に在ったが、集落の移転と共に現在地に移った模様である。講としては、天王講(約40戸)・朔日講(約20戸)が有り、神事が執り行われている。



菅井の井戸（菅井の由来）

伝説によれば、この辺りを稲荷山とも荒山ともよばれ、清水が湧いでる処があり、人々は清井戸とあがめ大切にした。時の移るにつれ、清井戸⇒清ノ井⇒菅ノ井とよび遂に村の名称までなったという。



永谷山隧道（ながたにやまずいどう）

古来より、この甘南備丘陵の東側山麓地域は、山間に溜池を数知れず作られたが、それでも農業用水の確保に苦労したそうです。

大正4年に、南稻八妻・植田・菅井の三集落で、煤谷川から永谷池まで水を引くために隧道が掘られ、長さは200mと100mの二箇所、水路延長は約1100mとなり、学研都市が開発されるまで使われていたそうです。



修徳碑・・・菅井地区と教育との関わり・・・

修徳社の活動（明治18年）

- ・時代背景 1.幕府が大政奉還の後
2.明治3年9月（暴風雨、木津川氾濫）
菅井堤、吐師堤、決壊
3.堤防復旧工事 4年2月工事開始
4.復旧工事人足（村、多額の負担）



菅井に高等小学校の創立

- ・菅井校（菅井小学校）
明治10年創設（菅井西山50-1番地）
- ・精華高等小学校
明治25年10月開校 5ヶ村組合立
（山田荘、相楽、狛田、稲田、祝園）
場 所 菅井小学校跡（菅井西山50-1番地）
当時、祝園村長松田氏の努力による。



精華高等小学校

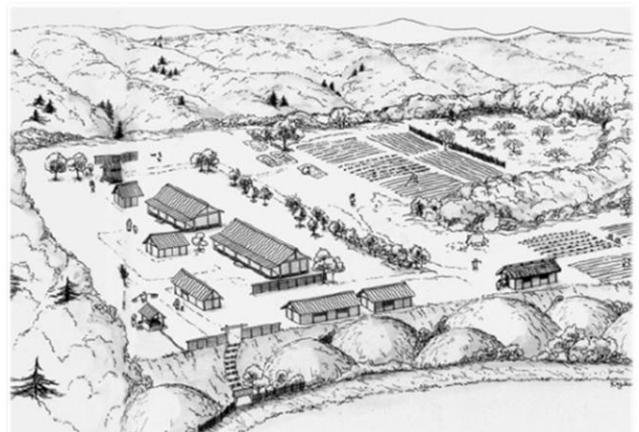
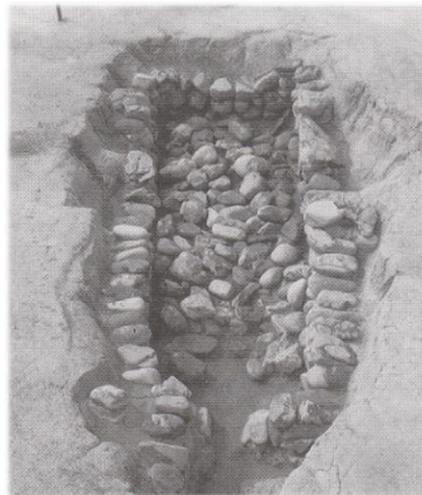
※写真：せいか歴史物語より

はたのまえいせき 畑ノ前遺跡

昭和59～60年(1984～1985)と昭和63～平成元年(1988～1989)に発掘調査が行われた。

下記①②③の複合遺跡が見つかったている。

- ① 弥生時代中期(紀元前100～西暦100)約2000年前の集落跡直径6～8mの竪穴式住居跡10棟。
- ② 古墳時代後期(6世紀前半～7世紀前半)約1400年前の古墳群川原石を使った特異な横穴式石室を持つ小規模な円墳7基。
- ③ 奈良時代の建物跡(7世紀末葉～8世紀前葉)23棟分の柱跡と宅地東南隅から直径1.14m、長さ3.54mのヒノキの丸太をくりぬいた井筒。
(井戸の深さは77mに達する大規模なもの)



8世紀前半ごろの畑ノ前遺跡復元予想図

※写真：せいか歴史物語より

稲植神社 (いなうえじんじゃ)

たてはやすさのおのみこと

稲植神社は『建速須佐之男命』を、南稲八妻・植田両区の氏神としてお祀りする神社です。

江戸期以前は『上田祇園社』という名の神仏習合の神社でしたが、明治維新政府により出された「神仏分離令」を受けて、明治2年に南稲八妻の「稲」と植田の「植」をとって『稲植神社』と改名されました。同時に、神社は改築され、神宮寺の『東福寺』は廃寺となりました。

現在の社殿は平成15年に全面的に改築遷宮されたものであり、立派な社務所は平成5年に改築されたものです。



如来寺 (にょうらいじ)

明治初年火災にあい廃寺となる。その際持ち出された位牌や仏像は、来迎寺や南稲の蓮台寺に預けられたが、明治20年現在の所にお堂を建立して6軀の仏像を引き取り、安産の御仏として祀り供養を続けている。今では如来寺講と地藏講の二つの組織で維持管理を行っている。



『お堂に安置されている仏像』（右から左へ①～⑥の順）

- | | | | | |
|---|---------|----|---------|---------------------|
| ① | 十一面観音 | 立像 | 105.8cm | 平安後期 |
| | | | | (平成7年4月 精華町有形文化財指定) |
| ② | 十一面観音菩薩 | 立像 | 54.3cm | 室町時代 |
| ③ | 阿弥陀如来 | 座像 | 36.5cm | 室町時代 |
| ④ | 不動明王 | 立像 | 54.5cm | 江戸時代 |
| ⑤ | 地藏菩薩 | 立像 | 37.7cm | 江戸時代 |
| ⑥ | 弘法大師 | 座像 | 34.0cm | 江戸時代 |



①十一面観音立像

河井寛次郎 (かわいかんじろう)

- 1890年 8月24日 島根県安来町大工河井大三郎、ユキの次男として生まれる。
- 1910年 東京高等工業学校窯業科 入学。陶芸家の板谷波山の指導を受ける。
- 1911年 パート・リチの新作展(赤坂・三会堂)を見て感銘を受け、後日リチの上野の居宅を訪問。 (21)
- 1914年 卒業後、京都市立陶磁器試験場で技師として、各種釉薬を研究。 (24)
- 1916年 東京高等工業学校の後輩「濱田庄司」が同試験所に入所。各種釉薬の研究。 (26)
- 1917年 試験所を辞め、2年間、五代清水六兵衛の顧問となり釉薬を作る。 (27)
- 1920年 五代清水六兵衛との縁で五条坂の窯を譲り受け「鐘溪窯」と命名、工房と住居を構える。
12月、宮大工の娘、三上やす(つねと改名)と結婚。 (30)
- 1921年 「第一回創作陶磁展観」を東京・大阪の高島屋で開催、好評を博す。宣伝部長の川勝堅一を知る。
- 1924年 濱田庄司を介し「柳宗悦」との交流が始まる。 (34)
- 1926年 柳宗悦・濱田庄司と「日本民藝美術館設立趣意書」を作成、配布。 (36)
- 1936年 東京駒場「日本民藝館」開館。 (46)
- 1937年 パリ万国博覧会に出品された「鉄辰砂草花図壺」がグランプリ受賞。 (47)
台風で傷んだ旧居を解体し、自らの設計で実兄を棟梁とする郷里の大工一行の手により新築。
- 1944年 戦火がはげしくなり、ほとんど窯を立てることができず、 (54)
- (S19年) もっぱら文筆に没頭。「民藝7月号」に植田村・釈迦の池を紹介。
- 1947年 寛次郎詩、棟方志功版画で「火の願い」を刊行。 (57)
陶土に自ら刻んだ「いのちの窓」の陶板を完成させる。
- 1953年 朝日新聞社より、「火の誓い」を刊行。 (63)
- 1957年 「白地草花絵扁壺」が、ミラノ・トリエンナーレ国際工芸展で
グランプリを受賞。 (67)
- 1959年 「面」の木彫を盛んに行い、11月の新作陶磁展に木彫面も多数出品。
- 1966年 6月頃より身体が衰弱しはじめ、11月18日永眠(76歳)。
- 1973年 2月、自宅を「河井寛次郎記念館」として公開。「所在地：京都市東山区五条坂鐘鑄町 569」



濱田庄司/柳宗悦/河井寛次郎

植田の集落、釈迦の池と河井寛次郎



釈迦の池を見る河井寛次郎



・「民藝」の機関紙(昭和19年7月号)より、
-7-

「長い年月自分は村を見て歩いたが、今日此の處に見た村の様に自分を有頂天にした村はさう澤山には無い。」「此の村位どの面を見ても、みにくい物の缺けてみる村は、さう他に澤山は無い。総べては何の故に、かくも美しいのか不思議である。此の村の中に詰ってみる、こんな箇々の物の素晴らしさもさることながら、其れにも増して驚くのは此の村全體が壓倒的に美しい事だ。」

・河井寛次郎にこうまでいわせた村は、現在の植田区なのです。

・著書の「火の誓い」の第一篇「物と作者」の冒頭「部落の総体」より、

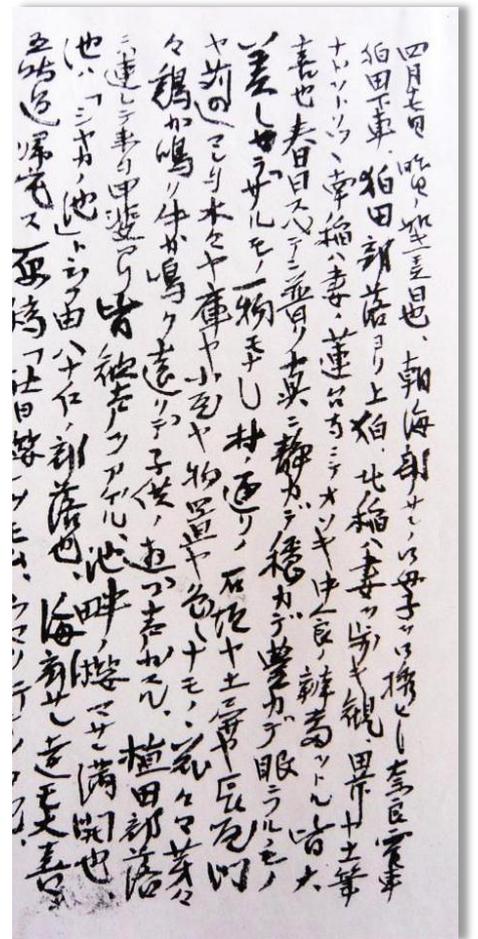
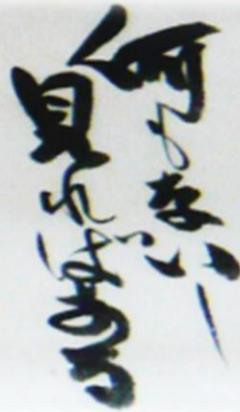
日も暮れ出して来たのでまた来る事にして、部落を出端れると思いがけない池に出た。しかもこの部落の全景を支配している池に出た。これは全く意外であった。考えてみると偶然にも自分は極めて順序よくこの部落を歩いていた。この美しい部落がこんな美しい池に沿っていたという思いがけない事を最後に知らされたのであった。

・・・(中略)・・・

その後ここへ行くごとに村の人々はぶらぶらしている自分に、何をしに来たかと問いかけたが、適当な返事が出来た事がない。美しいために来た—そういう事は返事にはならないからだ。それは解らなくても仕方がない。また解ってもらふ必要もないのだ。というのは何も知らずにこんな美しい村に住まっているという事自体、これ以上に素晴らしい事はない筈だから。

京都府相楽郡川西村大字植田というのがこの部落の名である。

(昭和19年7月)



寛次郎の日記（昭和19年）



河井寛次郎記念館
京都市東山区五条坂鐘鑄町 569



らい こう じ 来 迎 寺 (お千代・半兵衛の墓)

天平勝宝元年(749年)行基菩薩の創建と伝えられる。

阿弥陀如来立像をはじめ多くの仏像が安置され、江戸時代の梵鐘もあります。

又、近松門左衛門作「心中宵庚申」の主人公「お千代」の菩提寺としても有名。

このほか、幹周4.6メートルの大クスノキがあります。



メモ欄

- ☆ 交通ルールの遵守
- ☆ ゴミは捨てずに持ち帰る
- ☆ 通り道の草花は絶対に摘み取らない
- ☆ トイレ等へ行ったり、途中で帰る場合は必ず引率者に連絡する

ふるさと発見の旅 ……いままで案内したところは……

- 第1回 『お千代半兵衛の眠る丘からけいはんな丘陵を訪ねて』
- 第2回 『木津川沿いを歩く』
- 第3回 『古の佇まいの面影を残す精華古道を歩く』
- 第4回 『学研都市研究施設を巡り歩く』
- 第5回 『山田川流域の里を歴史と文化財の謎を探りながら歩く』
- 第6回 『精華町最高峰「嶽山」にいだかれた里 東畑を訪ねて』
- 第7回 『祝園八景を探る旅』
- 第8回 『山城の国一揆終焉の地を訪ねて』
- 第9回 『南山城三十三所巡り in 精華』

社団法人 精華町シルバー人材センター
ふるさと案内人の会

〒619-0244 京都府相楽郡精華町北稻八間井手ノ元27-1

TEL 0774-98-0510 FAX 0774-98-0670

Email seika@sjc.ne.jp